

ガンとともに生きる

医師として
患者として23年

村



医師として患者として23年

がんとともに生きる

村山良介

主婦の友社

ガンとともに生きる

定価 二二〇〇円

昭和六十三年七月八日 第一刷発行

著者 村山良介 公検印書局

発行者 石川晴彦

発行所 金株式会社 主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一―九 郵便番号 一〇一

振替 東京 二一八七五二七番

電話 (編集) 〇三―二九四―二一九 (販売) 〇三―二九四―二二三

印刷所 共同印刷株式会社

©Ryōsuke Murayama 1988 Printed in Japan
ISBN4-07-926996-X

もし誤丁、脱丁、その他不良の箇所がありましたら、おとりかえいたします。
お近くの書店か、本社へお申し送りください。

村山良介(むらやまりょうすけ)

昭和元年生まれ。信州大学松本医科大学(旧制)卒業。2年間アメリカ留学後、京都大学医学部助手、講師、助教授を経て、高知女子大学教授。54年より東邦大学医学部(麻酔科)教授。医学博士。

専門は麻酔学、特に慢性疼痛やターミナルケアに関心が深く、すぐれた業績を残す。日本疼痛学会理事、日本心身医学会評議員、日本病院設備学会理事、日本医科器械学会評議員。

昭和39年、直腸ガンの手術を受け、以来、人工肛門をつけながら、研究に、臨床に、教育に活躍しておられる。

はじめに

私のことを、生き長らえて醜影をさらしていると見ているかたもあるだろうが、本人は生きていてよかったと思っている。

ガンという死病にとりつかれたのに、二十数年死ななかった。どうしてかと聞かれても本当のことはわからない。まして医学的になどといわれたら本当にとまどってしまう。

そんなばかなことが、医者として恥ずかしくないのか、となじられても、そう思ったのだからしかたがない。それを許していただくしかないのである。

それでも自分の思ったこと、考えたこと、感じたことをそのまま書いてよいと言われたので筆をとることにした。

しかし、ガンになってから二十数年生きてきたことは確かであるから、私の場合もガンとともに生きる道の一つであることはまちがいない。だれにも通用しない道なのかもしれないが、またそこに何か役に立つものがあるかもしれない。

自分もガンの経験があるから、ガンの人の気持ちはそうでない人よりわかるといばって考えてみたが、本当はどうも違うようである。生きているのだから、死んでゆく人の気持ちなどわかるはずがない。でも、生きていないところいう文は書けないのだから、死にそうになった、死ぬと思って生きてきた、というぐらいで、少しはガンの患者さんに近い気持ちになったとお許しいただいて、読んでいただきたい。

くれぐれも申し添えておくが、医者が言ったのだからといって、そのままのみにして信じてはならないということである。これはあくまでも、つれづれなるままに綴った、たわごとの連続である。机の前に坐って読むものではない。寝るときにひっくり返って、ガンのやつてくだらないことを考えるものだという気持ちで、頁をめくってほしいものである。

もう一つお願いをしておこう。

こんなことが書ける自分を見つけて、本当に心臓の強いやつだと思ったことである。恐れを知らないやつになってしまった。死ぬんではないかとびくびくして過ごした数年、そこから生まれてきたあきらめというと聞こえはよいかもしれないが、本当は「ああくたび

れた」というのが事実である。

死ぬのなら美しく死のうと思った。また一方で、美しくとは何なのかという疑問もわいた。死ぬなんて美しくなく、いつもみにくいものだとも思った。それなら自分のしたいことをしてやれと考えた。

あげくの果てに、己が意のままに行つて矩をこえるならしかたない。それがどう考えても自分の姿のように思えてきたのである。小心なところが残つていて、おどおどする気持ちも否めない。見えは十分にある。人のためという殊勝な気持ちもある。親がまだ生きている、兄弟もいる、迷惑をかけたくないと考えることもある。結局わからないままに、人に迷惑をかけながら生きる。それが自分に忠実なように思えてきた。

そう思つて筆をとつたのだから、何一つまとまてはいない。みみずのたわごとではなく、狸のたわごとになつてしまった。私の面相からして、私のことをみんなが狸と呼んでいるからである。

だから、何かをつかもうとしてこの文は読まないでいただきたい。何か得るものがあるとしたら、それはきつと読んだかたの心の美しさから出たものに違いない。私はみにくい

姿をそのままに聞いていただくしかないのである。

「どうかよろしくお願いします」という言葉で結ぶ以外になくなってしまった。

昭和六十二年五月

村山良介

目次・ガンとともに生きる

はじめに／1

第一部Ⅱガンにおかされて……………7

ガンにとりつかれる／8

手術前にしたこと／14

「ガン」という言葉からの連想／23

ガンというもの／32

死ぬということ／39

食べるということ／45

食欲について／54

第二部Ⅱガンとケア……………63

痛みとケア／64

ガンの告知／74

ホスピス／82

友人がガンになったとき／91

人工肛門と洗淨法／100

私の工夫した人工肛門／109

人工肛門と入れ歯／118

第三部 幸せに生きる……………123

十三回忌／124

還暦のお祝い／130

なぜガンで死ななかったか／138

ガンを受容する／147

ガンになって得したこと／155

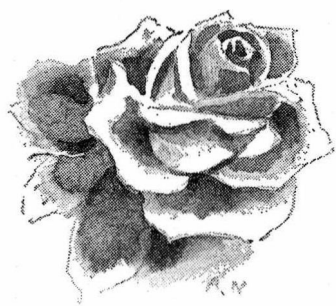
幸福は身近なところに／162

最近の生き方考え方／171

自分がいなくても地球は回る／182

あとがき／187

第一部＝ガンにかかされて



ガンにとりつかれる

昭和三十九年十月に、痔の手術をした。これは肛門の外に血管のぐるぐる巻いたかたまりが突出して、常に乾くことなく、よくパンツをよごして気持ちが悪かったからである。友人も痔があるのでいっしょに手術をしようと約束したが、彼は入院の前に用事ができたとやめてしまった。入院は一人だった。当時、私が麻酔科医長として勤務していた大阪厚生年金病院のよい病室だった。手術は簡単なものであったらしい。意識があると私がうるさいからといって、肛門のところだけの腰椎麻酔だけでなく全身麻酔を加えたらしい。だからそのときは何も覚えていない。術後痛みが強かったので、モルヒネが注射されて、血圧が六〇ぐらいになり、気持ちが悪かったのを覚えているだけである。

一週間で退院した。退院の前にレントゲン検査で、胃から腸まで調べてもらった。退院

後一週間ぐらいは便通のときに本当に気持ちが悪かった。しかし、二週間目に便の形が円形でないのに気がついた。平べったいのやら半円形で出てくるのである。そして、しばらくすると、ひどい便秘が起きてきた。便秘がしばらくつづくと、次にはひどい下痢がやってきた。そしてまた便秘となった。交互にひどい便秘と下痢が起こるのである。便秘のときに便意を催して便所に行くと、何か出てくるのである。それは、へらへらした皮膚の小片のようなもので、水洗便所の水の底に粘液のようなものとともに相当量たまっているのである。ときにはピンク色のように見えた。「ガン」この言葉が頭にひらめいたのは、このときであった。でも「自分がガンになる」などとても信じられなかったのである。

厚生年金病院の外科の浅野先生に、指を肛門から入れて検査をしてもらった。何もさわらないということだった。この言葉で少しほっとした。でも次の日にロmanosコープの検査を受けることにした。ロmanosコープというのは、肛門から金属の筒を入れて直腸の検査をするもので、日本語では肛門鏡という。

痔の手術が終わっていたので、たいした苦痛もなく、ロmanosコープが肛門に挿入された。痔の手術をしてなかったら、とても痛くて、こんな検査は受けられず、また、そう思

つて決して受けようとしなかったに違いない。

「一〇センチより少し奥に何かあります」

これがガンの発見の第一歩だった。

「組織をとりましょう」

別に痛みもなく、奥にあった何分の一ミリほどの小片がとられ、そして病理部へ検査のために送られた。

病理の部長が平気な顔で、

「腺ガンですよ」

と言った。彼は気の毒に思っていたのかもしれない。よく知っている人なのに、あくまでも事務的な普通の顔のように私には見えたのである。ガンとはそんなものなのである。すぐ死ぬわけではない。今すぐ手術をするほうがよいが、一カ月後でもあまり問題とされない。たいていの場合は患者は苦痛を訴えてはいないので、あわててする治療はないのである。まして、ガンになったのは自分ではない。人間は自分のことでなければ、そんなに深く考えるものではない。そのうえ、この私は医者の方であつた。くわしく言わなく

でもわかるはずである。そんな気持ちを病理の部長は持ったのであろう。そのとき、この部長と自分との間に大きな谷間ができているのを感じて、よく知っている部長の顔を眺めたものである。

もう夕方になっていたので、あわててみてもしかたがなかった。そのとき、外科の浅野先生が慰める意味も含めてか、新車を買ったので乗ってみませんかと言ってきた。車は実にスムーズに動き出した。あまり自動車に興味がないので、どの車であったかは覚えていないが、今日の車ほどよくなく、いろいろな計器もついていなかったに違いない。でも真新しい車が、快適に動くのには楽しい思いがしたものである。

「これはまだあまり世に出ていない車ですよ」

と浅野先生が言った。

走りながら車の中をいろいろ見ているとき、ふといつもと違うことに気がついた。

これからどうしよう。家の者には早く知らせたほうがよいか。本当にガンなのか、どのくらい進んでいるのか、手術はいつしようか、このようなとめどもない思いが浮かんでは消える。自動車に乗って楽しんでる自分と、あれこれ思いめぐらせている自分。二人の

自己が存在しているのである。子どものころに、おもしろい遊びの途中で、帰らなければならぬし、もつとつづけたい。帰るのを心配しながら、しかられるのを恐れながら、遊んでいたのを覚えている。このときも確かに二人の自己であるが、それは同時に存在することは少ないのである。右にしよう、左にしようという自己が交互に出てくるようで、同時に二つのことは考えていない。でもいまは楽しんでる自分を静かに見つめて、心配している自分をはっきりと感じたのである。

ガンの手術が終わり、五、六年はハッキリとこの二人の自分を感じながら生きてきた。そして、しだいに消えていったが、今でも時によってあらわれてくる。この二人の自分を感ずることは本当に悲しいことである。世の中に起こる楽しいことを楽しみ、張り切って何かをしようとするときに、常に生きているもう一人の自分が、これを批判する。それは生きていたいという願いから出ている。そして、それが不可能なことをうすうす知っている自分の冷静な目で見つめるのである。「楽しみなさい。しかし、それはほんの一時なのだよ」とささやいてくる。「あなたは限りというものを知りなさい」とも言う。

この二人の自分があることは、私の場合、そのときはつらかったが、今考えれば非常に

幸福をもたらしたと思っっている。それは、私ののんきな性格によるのかもしれないが、二人目の自分のささやきや忠告をわりに素直に聞くことができたのである。のんきというより、さぼることが好きだからと言ったほうがよいであろう。どんないじめにも、あの人もいつかは死ぬのだ、かわいそうに、ですまされるからである。あれもせねば、これもやらねばとやたらに考えて、体を使うことはないよ、というささやきに従えたからである。

ガンと知った人は、この二人の自分をきつと味わうに違いない。そして、自分を正しいと思っっている人、まじめ人間は、うつの傾向になるに違いない。正しいことができず、思うことが全部はできなくなるのだから、今まではできていたのに。このうつになることが本当に損なことなのだ。ガンといわれ、手術をして生きている友人を見ると、だれもが自分なりに、その時期を乗り切っている。

親鸞の教えにある「悪人なおもて往生すいわんや善人おや」この悪人になりきることが必要のようである。人間ののんきさが大切だなんて思ったこともなかったが、悪人になりきれのんきさが、私を救ってくれたようである。本当は私は細かいところに気のつく人間だと自分で思っていたのに。

手術前にしたこと

みずからガンになり、手術をしなければ医師としてみつともないという気持ちに駆られて、年の瀬の最後の手術日、十二月二十七日の手術予定表に自分の名前を書き入れた。当時手術の予定表は麻酔科がつくっていたのである。これはガンとわかって二週間目であった。

この二週間の間に私が何をしたのかを思い出してみると、人の気持ちの動きというものがよくわかると思う。まず私がしたことは、手術を頼みにいくことで始まった。今でも覚えていいる。京都大学の本庄一夫教授のお部屋には、歴代の教授の権威を物語るような、時代を刻んだ椅子がおかれていた。のちに関西医大の理事長になられた先生も、当時は最も頼りがいのある外科医という姿であった。